

社会福祉施設訪問布教法話

平成 21(2009)年7月 21 日

堅田 玄宥

ご議題

十方微塵世界の念仏の衆生をみそなわし

摂取して捨てざれば阿弥陀と名づけ奉る

(浄土和讃「弥陀経の意(こころ)Ref 註釈版 P571」)

1. はじめに

皆様、こんにちは、私は以前に一度寄せて戴いたことがございます。今度五年ぶりでまた寄せて戴きました。皆様、ご機嫌はいかがでしょう。毎日、どのようにお過ごしでしょうか。皆さんはテレビの番組はお好きでしょうか。テレビの番組の好きな人手を挙げてみて下さい。

2. どんと晴れ

NHKのどんと晴れという番組はご存知でしょうか。

近頃、私はこの番組を見るのが楽しみです。

朝早くでなければならぬときは、見る事ができません。

日曜日はみる事ができませんが、それ以外は一日に三回放送されますので、欠かさず見るようにしております。

青森の老舗旅館の加賀美屋さんを舞台にしたお話ですね。

面白いですね。

今日のような時代に、なつみさんという主人公が格式を重んじる旅館のお女将修行をする番組でしたね。

なつみさんとあやかさんとのどちらが若女将(おかみ)にふさわしいかという競争劇がここしばらくのお話でした。

なつみさんは、とても加賀美屋が好きだ、加賀美屋の心を大事にしていきたいという情熱にあふれているという事と、何よりも人を信じて生きるという素朴な生き方が競争相手自ら負けを納得させることになったのでした。

他に、みなさんどんな場面が印象に残ったでしょうか。

旅館の調査員が、部屋から岩手山が見えないことを承知で岩手山がどうしても見たいといいましたね。

そのとき、なつみさんは、調査員に目をつぶって下さい。

私が岩手山のお話をしましょうといいましたね。

四季折々の岩手山の姿、それは実は見るものの心が映し出された姿だといいませんでしたか。

私が悲しい心で岩手山を眺めるとき、岩手山は悲しい姿に見える。

私が希望に満ち溢れた姿で岩手山を眺めるとき、岩手山は生き生きと輝いて見えるとこの説明はすばらしかったですね。

なつみさんの前向きの人を信じる姿勢はとてもすばらしかったと思います。

人を信じることの大切さをこの番組は教えてくれたのではなかったでしょうか。

「**どんど晴れ**」と番組の最後に子供の声が聞こえますね。

「**どんど晴れ**」だなんて、どういう意味か私は興味を覚えて調べてみました。

そうするとわかりました。

これは「盛岡の言葉」なんですねえ

「**ドットハレア**」「**どっとはらい**」というのがもともとの言葉なんですねえ、昔話の語り終わりに称える決まり文句なんだそうです。

「遠野物語」というのは岩手県に伝わる物語で、柳田国男さんというお方がご紹介になりました。

「遠野むかしばなし 鈴木サツ自選50話」ではそれぞれの物語は「**どんどはれえ**」で締めくくられているそうです。

遠野物語では、ザシキワラシというこれは神様なんだそうですね。遠野の旧家にはザシキワラシという神様が住んでいらっしゃる家が少なくはないそうです。

ザシキワラシの多くは、十二、三ばかりの童子で、男の子であったり女の子であったりするそうです。折々に人に姿を見せたり、隣の部屋にあってガサガサ音を立てたり、しきりに鼻をならすことがあるそうです。

ザシキワラシという神の宿るお家は豊かであるけれども、立ち去るお家の家運は傾くことになるのだそうです。

そういえば、テレビのどんど晴れの中でもザシキワラシがでてきましたね。

若女将競争相手の綾香さんが組合費を盗ったとき、ザシキワラシがこれを知らせたのでしたね。

面白いことに、草笛光子扮する大お女将カツノさんと幼馴染の南部鉄器職人の平治さんの言葉を借りると、主人公のなつみさんまでザシキワラシと呼ばれていたのではなかったでしょうか。

そのなつみさんは人を信じる気持ちが大切だといっていましたね。

「人を信じる」ことの大切さ、一つこのことを覚えておいて戴きたいと思います。

3. あの子はたあれ

みなさん、ここで、両手を上にあげてそのままの姿でうーんと背伸びをしてみてください。はい、大きく息を吸って吐き出してみましよう。少 - し、気分がよくなりましたか。

ここで、一つ昔懐かしい調べを口づさんでみましよう。

皆さん欲ご存じの「あの子はたあれ」という曲です。

細川雄太郎作詞、海沼 実作曲

一、あの子はたあれ たれでしょね

なんなんなつめの花の下

お人形さんと あそんでる

かわいいみよちゃんじゃ ないでしょか

二、あの子はたあれ たれでしょね

こんこん小やぶの細道を
竹馬ごっこで あそんでる
となりのけんちゃんじゃ ないでしょか

三、あの子はたあれ たれでしょね

とんとん峠の坂道を
一人でてくてく あるいてる
おてらのこぞうさんじゃ ないでしょか

なんという懐かしい調べでしょう。

日曜学校(にっしょがっこ)でこの歌を初めて聞いた小学生も、初めてだというのに、繰り返し歌ってみせると、ことばの調べの懐かしさ故にか、それほどの抵抗感もなく歌ってくれます。

尤も、かわいい「みよちゃん」の代りに、その日集った子供達の名前を入れてみるんですけれどもね

女の子は一番の歌詞で、男の子は二番の歌詞で、繰り返しみんなで歌うと、誰もみんな気に入ってくれます。

この詩は、滋賀県出身の方がお作りになったことをご存じでいらっしゃいますか。

今から十五年前の出来事(平成二年六月三日)です。

「あの子はたあれ」の歌碑の除幕式が群馬県蕨塚本町で行われました。

滋賀県日野は近江商人のふるさと、**細川雄太郎**さんは郷里で採用され、近江商人の伝統に従い**お店(たな)勤め**で群馬県蕨塚本町の醸造会社に奉公に出かけられました。

細川さんのお父さんは十歳の頃亡くなり、妹と二人、助産婦のお母さんの手一つで育てられたというのです。

産婆さんですからお母さんが夜中に呼び出され、飛び出して行くことも度々でした。

其の都度、目を覚ました妹をあやすことも多かったといえます。

肩を寄せ合うように暮らしてきた家族と別れ、住み込みで働き始めました。

最初の何年間かは帰れません。

郷愁は募るばかり。

細川さんが歌と出合ったのはそんな二十才の頃だといえます。

工場の宿直をしていたある夜、外からハーモニカの音が聞こえてきました。

吹いているのは近くに住む小学校の先生。

作曲しているのだといえます。

それが縁で細川さんは詞を書き始めたというのです。

作詞は深夜、会社の二階の大部屋で、同僚が寝静まった頃、明かりが漏れないよう、布団の中に電灯を下げてはノートを開きました。

「自宅のナツメの木の下で、箆を敷いて遊んだ女の子が居たなあ」郷里を思い出しつつ書いた作品は、昭和十四年「**なく子はたあれ**」で同人誌に発表され、**作曲家の海沼 実**の目に留まり、翌年レコードに吹き込まれました。

まもなく先の大戦に召集された細川さんは、戦争が終って無事郷里にお戻りになりました。

長男として家を守らなければならない。母や妹、郷里への強い愛情が細川さんの行動を律していたからです。

「あの子はたあれ」が童謡歌手の川田正子、孝子姉妹の歌声でヒットしたのは戦後のことだったといえます。

群馬県薮塚の元中学校教師、酒屋を営む植木吉彦さんが細川さんの半生を記す新聞の特集記事に接したのは一九八三年九月のことでした。

以来、「郷土にまつわる名曲誕生のドラマをこのまま埋もれさせてはならない」との熱意から細川さんとの文通が始まったそうです。

植木さんは、機会ある毎に歌碑の構想を周囲に訴え続けました。

やがて機会が訪れました。

一九八六年同町中央公民館の開館十周年を迎えるに当り、記念事業に細川さんを講演にお招きする企画が通りました。

十一月三日、薮塚を再訪した細川さんは、壇上に立ちました。

思いがけないことが起りました。

久々に薮塚の地を踏んだ感激だったのか、言葉に詰まった細川さんは、感極まってむせび泣きました。

そのとき、会場の片隅から「あの子はたあれ」を歌う声が上ったというのです。

一人が二人、二人が三人に。程なく会場一杯に大合唱が沸き起りました。

歌声に励まされる様に、笑顔を取戻した細川さんも声に出して一緒に歌いました。

細川さんの郷里の家の前には、今も歌詞に昇る**ナツメの木**が青々と葉を茂らせて居ます。

高さは五メートル程にもなるそうです。

細川さんが奉公に出る頃は、この木もほんの背丈位だったといえます。

細川さんが迎った半世紀に及ぶ人生の重みには、私たちの胸を揺るがす何かがあります。

細川さんを育くみ私達を育む大いなる命の流れが今も生き生きと息づいているからではなかったでしょう。

(Ref:読売新聞文化部1999年8月25日刊「唱歌・童謡物語」)

「あの子はたあれ」の作詞者細川さんの子息は、私のお寺の坊守が八日市高校で同級だったそうです。

懐かしいお話はまた、遠くて近いお話でありました。

4. 朝顔につるべとられてもらいみず

(1)朝顔につるべ取られて 貰い水

という俳句は皆さまもよくご存じでいらっしゃるでしょう。

加賀の千代女さんの有名な俳句であります。

私が初めてこの俳句に接したのはまだ幼い頃、祖母から語って聞かせられたときでありました。

この娑婆世界において、いのちを戴いて生きるものは、一人人間だけには限りません。

犬や猫はもちろんのこと、小さな昆虫に至るまで掛け替えのないいのちを精一杯生きているのです。

動物だけではなく植物にもいのちが賜ってあります。

お米や沢山の種類の野菜さんにもいのちがある。

そのいのちを頂戴して活かされて生きているのが私達人間であることに思いを致したいことです。

ある朝のことです。

千代女さんが、目覚めて洗面に井戸に赴くと、

一晩のうちに井戸のつるべに朝顔が巻き付いて居るではありませんか。

それを見て、千代女さんは、折角巻き付いた朝顔のつるをそのまま伸ばしてやろうとお思いになりました。

なんて優しい心根の千代女さんでいらっしゃったことでしょう。

彼女は、著名な俳人でしたが、その前に篤信の念仏者でいらっしゃったのです。

その千代女さんに今ひとつ次のような俳句があります。

(2)うつむいたところが台すみれ草

これは、彼女が五十二才で得度して尼僧になられた年、毎年4月末から5月にかけて営まれる蓮如忌で吉崎御坊に参詣し、そのときものした句であると伝えられます。

この句の心について、解説書があったわけではないのですが、

私は次のようにうけとめさせて戴きました。

一句のさりげなさは、あくまで可憐なすみれ草そのままですが、

よく見ると「台(うてな)」とあるではありませんか。

この句の命は「台(うてな)にある」と、申しても決して過言ではありません。

「台」を見落としてはならないのです。

では「台」とはいったい何か。

「台」とは、まさしく千代女さんを迎え取ってくれる

あのお浄土の蓮の華の台を指すことでありました。

自らのつつましさを反映するかのように、

千代女さんは立派な蓮の華の台ではなくて、

可憐なこのすみれ草であると戴いて行かれました。

「私をお浄土に迎え取ってくれるのは、

この可憐なすみれ草の台であったことよなあ」

と、千代女さんは歌い上げられたのでありました。

「この私を浄土に迎え取ろう、疑いなくワレヲタノメ」

との阿弥陀仏の仰せに対して、

「お恥ずかしいこの私がのう」と、とうとう、

阿弥陀如来のご本願に頭が下がる(うつむいた)そのときこそは、お浄土のお約束が、お浄土の香りがこの世に漂いだしてくることでありました。

5. しつらんしつらん

今から八百年前の出来事です。

法然上人は、お念仏一つで一人の例外もなくお浄土に生まれることができるとお説き下さいました。

法然上人は、私たちの日常の姿のままでお念仏をお称えなさいませよとお勧めになったのです。

あるとき明遍僧都が次のような夢をご覧になったというのです。極楽浄土の入り口に通じているという四天王寺の西の門で一人の上人が体の不自由な方々に対しておかゆをそそってさしあげていらっしゃる様子でありました。

明遍僧都が「あのお方はどなた様ですか」と夢の中でお尋ねになりますと、「あのお方こそ誰であろう、法然上人様です」と人々が教えてくれたというのです。

法然上人は一生涯罪を作りよいこと一つできないような私たちには如来様の御本願が叶って届けられた南無阿弥陀仏のお念仏を称えさえすれば、如来様の本願力によって次の世は間違いなくお浄土に向かえ取られると優しくお示しを戴いたのであります。

はるかに1500年の歳月を傾けてインドから日本に伝えられた仏教が、法然上人のご苦勞によって、初めて私たち民衆のものになったのでした。

まことにありがたいことであります。

ところが、その法然上人以下のお弟子様方が“承元の法難”というご災難に御会いになりました。

承元の法難というのは、奈良の興福寺や延暦寺の働きかけによって当時の朝廷、後鳥羽上皇が法然上人以下の方々を遠流や斬首の刑に課するという杜撰な裁定に基づく出来事でありました。

このとき法然上人ご自身は、讃岐の国に流されておいでになりました。

これは、法然上人のお乗りになった船が配所讃岐に赴かれる途上、播磨の国は、室の泊の遊女が法然上人にお出会いしたときのお話であります。

室の津に法然上人の船が立ち寄った時の出来事です。

一艘の小船が近づいてきました。

遊女友君の船でありました。

遊女が申すことには

「私は思いがけずお恥ずかしい職業を営んでおります。

私のような罪の深い者は、一体、どのようにすれば、来世は助かることができるでしょうか。」と上人にお尋ねしたというのです。

法然上人は、「命がけの道心が起こらないならそれもよし、ただそのまま、もっぱらお念仏をお称えなさいまし。

阿弥陀如来は、そうした罪人を第一に救い取らんとお誓いあそばしたのですから、一筋にご本願にお任せして、あえて自らを卑下するにはおよびません。

本願を信じ念仏申せば、極楽往生は間違いがないのですから」と懇ろにお導きになったということでした。

これを聞いて、遊女は随喜の涙を流したというのです。

随喜の涙ですよ。

後に上人がおっしゃったことには、「遊女の信心はいかにも堅固そのもの、定めて浄土往生間違い無し」と

4年後に上人が都にお帰りになる途上、再び室の泊に船が立ち寄った時「あの遊女はどうしたか」とお尋ねになったところ、

「彼女は、爾来、近くの山里で庵を結び念仏一筋の余生を送りましたが、去年(こそ)の秋お念仏を喜び喜び臨終正念にして(臨終にはしっかりとご信心を戴いて)、やがての旅立ちを致しました」と応えました。

それを聞いて法然上人は思わず

「しつらん、しつらん(そうしたであろう、そうしたに違いない。)」とおっしゃったというのです。

この物語は、日本靈性史に残る特筆すべき出来事であるとは、近年仏教を西欧にご紹介になった鈴木大拙博士の言葉であります。

6.まとめ

さて、「どんと晴れ」では、主人公のなつみさんは人を信じることが一番大切だといいましたね。

でも、私たちの人生では人を信じきれない悲しみに出会うことが決して少なくはありません。

人を信じきれないというのが私たちの悲しい性ではなかったでしょうか。

そういう私たちに対して、阿弥陀如来様は御本願をお建てになり、南無阿弥陀仏のお名号のお姿で働きかけてくださるのでした。

お立ち向かいのご本尊は、ありがたい観音菩薩様です。

観音菩薩様は、阿弥陀如来様のお慈悲のお心を表して下さる菩薩様であります。

如来様、観音様は、私たちがそうと気づくよりもはるかな昔から、ワレニマカセヨと私たちに働きかけていてくださるのでした。

私たちが観音様を信じるよりも先に、観音様の方から私たちを信じていて下さるのではなかったでしょうか。

摂取してすてざればの摂取とは、摂めとる、ひとたびとりて永く捨てぬなり、摂はものの逃ぐるを追はへ取るなり、

摂はをさめとる、取は迎へとる」と親鸞聖人はお示しになられました。

ともすれば背を向け逃げようとする私たちの後ろから歩み寄って、悲しむではないよと抱きかかえてくださっているのが観音様、如来様ではなかったでしょうか。

その観音菩薩のお心にすっかりオマカセする、どうぞ一つオタノ申しますというお心で、最後に皆様とご一緒にお念仏で締め括りたいと思います。

皆さん、どうぞ一つ大きなお声をお出しいただきご一緒にお念仏をお称え戴きたいと存じます。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

合掌